

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

物が高いとか、不足しているとか、ぶつぶつ不平をこぼす。しかし、ではその反面でそうした物を活かして使い、細やかな心づかいをし、大切にしているかというのと、必ずしもそうではないのではなからうか。食べ物についていうと、魚でもまだ身が残っているのに、捨ててしまう。子どもたちが食い散らかし、食べ残していても、注意もしない……。

ご飯つぶを落とす。拾いもしない。むかしはぼさつ様などと言われ、一粒でも粗末にしたら「お百姓さんの苦勞を忘れたらいけない。バチが当たる」と叱られたものだ。

今日生きていられるのは、昨日、一昨日と毎日何かを食べてきたからだ。細かにいうと、一食ごとに自分の生命の元を仕入れているのである。だから食べ物は生命の元なのだ。生命の元だから、食べ物を大切に扱う。大切にすると、尊重し、できるだけいいねいに扱い、ムダを省くことだ。食糧が足りようと、足りなからうと、いつもこうした心がけや姿勢で食べ物に接するのが正しい。生命の元を粗末にするのが正しいとは、口が裂けても言えないのである。その意味では、さかのぼっては、食糧の元になるさまざまな自然物をも、もつともつと大切にしなければなるまい。



贅沢が体をこわす

丸山竹秋

日本では、もともと古い時代から食べ物に尊重する精神があった。斎庭（ゆにわ）の稲穂といつて、五穀の代表としての稲は、神聖視され、また瑞穂、高千穂とも尊ばれた。秋の収穫のときには、稲そのものを神としてニイナメ祭が行なわれ、現在では天皇の即位式の中に、その形式が残っているほどである。また伊勢神宮では御饌殿（みけでん）において毎日、雨の日も風の日も、日別朝夕大御饌祭（ひごとあさゆうおおみけさい）といつて、山の幸、海の幸をおそなえする儀式が行なわれているが、これらはすべて食べ物を尊ぶが故である。これらの中にこもる根本精神を深く理解し、そのよいところを今こそ実生活に生かすべきではなからうか。

一時的にでも食べ物に恵まれると、たちまちわがままになり、あたりまえのことすら忘れてしまいがち。贅沢になり、その結果、体をこわす。食生活は、つましいほうがむしろ健康的だといわれるくらいだ。遠からずして人類が食糧不足に直面するであろうとの声を、私たちは天の警告と受けとり、今から自然を尊重し、生き物の乱獲をつつしめ、粗末にしないように心がけよう。そしてこのようにする人を、一人でも二人でも多くつくるのが、地球社会にたいする自分自身の使命であると自覚しようではないか。その運動こそ家庭を、そして広くは社会を改善していく基盤ともなり、政治を動かすともなるのである。

（『あなたは生命の元を見つけたか』より）